筑波学院大学紀要第16集　115 ～ 125 ページ　　2021年

＜研究ノート＞

沖縄念仏の歌詞と構成
―アンガマーと島エイサー―

坂本　　要*

The Song of OKINAWA Nenbutsu, Text and Performance

Kaname SAKAMOTO *

抄　録

沖縄の盆踊りとしてエイサーが有名である。この太鼓エイサーは先島を含め沖縄全体に広まっているが、歴史は新しい。この太鼓エイサーに対して手踊りエイサーとか島エイサーといわれる古い形がある。エイサーは盆の旧暦七月に踊られるものであるが、沖縄本島北部では盆明けに踊られる七月モーイ（舞）がある。エイサーの元は念仏踊りであると言われ、踊りの始めは念仏歌で踊られる。石垣島などの先島では念仏歌が歌われるのは、アンガマ―と言われる盆の踊りで「無蔵念仏」や「孝行念仏」「継母念仏」の歌である。八重山と沖縄北部の念仏歌の歌詞の比較を行い、京太郎（チョンダラー）の影響があることを念仏歌の唱えや踊りの芸態から、その成立を考えた。

キーワード：沖縄、念仏、盆踊り、念仏踊り、エイサー、アンガマー、八月踊り、七月モーイ、チョンダラー

はじめに

この資料と論は先に発表した「沖縄の念仏歌とチョンダラー―アンガマーと島エイサー―」（『仏教経済研究』No.49駒澤大学仏教経済研究所2010年５月）に対応している。先の論では八重山と沖縄北部の念仏歌の比較を行ったが、枚数の関係で歌詞の分析まで至らなかった。それを補うとともに、念仏歌の唱えや踊りの芸態を考えたい。

先の論の要旨は以下のとおりである。

「沖縄の盆踊りとしてエイサーが有名である。この太鼓エイサーの踊り方は先島を含め沖縄全体に広まっているが、歴史は新しい。1919年（大正８年）で宜野湾市の北谷（ちゃたん）村（現嘉手納市）エイサーを元に空手の振りを入れて勇壮に踊ったのが始めと言われる。この太鼓エイサーに対して手踊りエイサーとか島エイサーといわれるものである。エイサーは盆の七月（旧暦）の踊られるものであるが、沖縄本島北部では盆明けに踊られ七月モーイ（舞）・七月デイ（手）という。

＊　筑波学院大学名誉教授、Tsukuba Gakuin University

エイサーの元は念仏踊りであると言われ、踊りの始めは念仏歌で踊られる。石垣島などの先島では念仏歌が歌われるのは、アンガマーと言われる盆の踊りで「親の御恩」や「継母念仏」「孝行念仏」の歌である。

沖縄の念仏信仰は袋中上人に始まるとされ、ニンブチャー（写真１）もその系譜を引くとされたが、ニンブチャーは近年までいて葬式時に鉦を叩いて念仏を唱えていた。一方、那覇北部の行脚（あんぎゃ）村には京太郎（チョンダラー）がいたとされる。京太郎は本土から渡ってきたフトキ（仏）まわしという人形を操る人形遣いで、沖縄を行脚していた。念仏歌の代表的なものは「継母（ままおや）念仏」「七月念仏」「無蔵念仏」「親の御恩」などで八重山地区に色濃く残っている。一方沖縄本島北部では「仲順流れ」や「二合節（酒たぼれ）」などの京太郎の物語歌や口上が念仏歌とされている。エイサーに京太郎が道化として登場するのも念仏歌をもたらしたことによるものであろう。京太郎が念仏歌の伝播に果たした役割は大きい。」

1、 八重山の念仏歌

石垣島を中心とした八重山地域の念仏歌には「無蔵念仏」「継母念仏」「七月念仏」「孝行念仏」「大和の山伏」他がある[1)]。表題は異なるが同じ内容であったり、同じ内容で表題が違うということがある。また入れ替えや一部省略も多い。

念仏本の古いものは、琉球大学伊波普猷文庫にある同治五年（明治５年・1872）の『念仏集』で「親の御恩」「まゝ親」「「天神世界」「梅のだんぎ」「あの経」「春咲花」「ちょうじゃの流れ」の七編が載っている[2)]。

明治二七年（1894）の伊礼本『念仏集』には前記七篇に「山伏の流」「歌念仏」「親の御普提」「親念仏」「十時念仏」「拾三仏」が書かれている[3)]。

折口信夫が大正十年（1921）に来島調査した記録「沖縄採集手帖」[4)] には「親のぐぶらん」「継親の念仏」がある。

大正十三年（1924）に調査し、翌年に出版した宮良當壮の『沖縄の人形芝居』[5)] に十一の念仏歌を採集している。「御知行の歌」「山伏」「「唱門の詞」「念願の文句」「京の下り」「浄土宗の文段」「浄土宗の孝論」「継親念仏」「チュンジュン・ナガリ」「馬舞し者」「鳥刺し舞」である。

筆者が調査した八重山地区六ヵ所（石垣市登野城・竹富島・小浜島・黒島・西表島祖内・波照間島）の盆のアンガマ―で歌われているのは「無蔵念仏」「七月念仏」「孝行念仏」「園山念仏（山伏）」「孝フダイ念仏」で「小浜島」には「ミンマン経」という念仏歌がある[6)]。以上資料をもとに、その内容を比較していくと異同が分かる。

念仏本の歌詞については島尻勝太郎が「沖縄仏教史の一側面」で伊波普猷文庫『念仏集』をもとに以下のように分類している[7)]。

（イ）浄土宗の文段（無蔵念仏・親の御恩）
（ロ）浄土宗が孝論（コーフダイの歌）
（ハ）継親念仏
（ニ）天神世界
（ホ）梅の談義
（ヘ）阿の経
（ト）春咲く花

（イ）の「浄土宗の文段」は『沖縄の人形芝居』の中で「ジュールシュー・ガ・ムンダン」の訛語を和文に直したものである。『念仏集』では「親の御恩」となっており、「無蔵念仏」（石垣市登野城（とのしろ）・竹富島・小浜島・黒島・西表（いりおもて）島祖内（そない））・「孝行念仏」（竹富島・小浜島・黒島・波照間島）と言われ広まっている。歌詞は同じである。無常念仏の意といえよう。内容は親の子に対する気遣いを述べ、親が亡くなってからその恩に気づき悲しみにふけると

いう内容のものである。「父母恩重経」の影響があるとされる。「父母恩重経」は中国で作られた偽経とされるがパーリー語本も発見されている[8)]。釈迦が阿難に対して父母の子に対する十種の気遣いを「十恩徳」として述べ、子が大きくなってそのことを忘れてしまうことを諭すという内容で、趣旨は「無蔵念仏」と同じである。「十恩徳」のうちの第五の「廻乾就湿の恩」親は子のために濡れたところに寝て子供を乾いたところに寝かすという話で、この部分が「無蔵念仏」に入っている[9)]。

（※以降本論ではウチナーグチのカタカナ表記は諸本によっての異なりがあるので、内容の比較が主とするため、歌詞は宮良當壯の和文記述による。）

歌詞

「無蔵念仏」・「親の御恩」

『沖縄人形芝居』所載

親の御恩は深きもの / 父御が御恩は海深く / 母御が御恩は山深く /
海の深さは悟られぬ / 山の深さは悟られる（られぬ？）/
晝晩父御が足が上に / 夜晩母御が懐に / 十重ね八重ね御衣が内 /
濡れたる方には親が寝る / 乾く方には子を寝せて /
尻口濡るれば胸が上 / 是ほど親に思われて /
十歳が二十歳がな（り）たれど / 我親御恩は未だ知らず /
散り（死し？）ての後にあはれ知り / 散らず見ゆれば（ゐませば？）哀れなし /
日元（夕陽）の下がれば木戸に待ち / 金星（ゆうづつ）の上がれば辻に立ち /
我親待てども待ち得ない / 浅茅の浜まで出で見れば /
荊ヶ岡に建てる墓印 / 青萱山押し分けて /
其家の近家に宿借りて / 夜の夜中に夢拝で（夢を見て）/
悲しき親とも夢拝で / 寝覚めて探れば親離れ（親はなし）/
父呼び母呼び聲すれば / 声あるものにぞ山響く /
再び物に賺されて / 何時か（疾く）今日の夜も明けなまし /
親てふ姿も拝み度し / 舊の館に押し戻て /
父御が手近さも取り擴げ / 母御が形見も取り並めて /
其の見て涙の休まらぬ / 涙は袖さへ押し流し /
是程あさましき事のあるか / 波阿弥陀仏は見えぬ仏 /

（ロ）の浄土宗が孝諭は「ジュールシュー・ガ・グブラン」と記されている念仏で「グブダン」「コーフダイ念仏」「孝行念仏」といわれている。親孝行と親不孝を対比する内容になっている。宮良當壯はグブランを内容から孝行を諭す「孝諭」の字を当てている。伊礼本では「御普提」の漢字で書かれており、「御菩提」の可能性もある。後半に橋を渡る記述があり、浄土宗の二河白道の教えを説いているとされる。

歌詞

「コーフダイ念仏」「孝行念仏」

『沖縄人形芝居』所載

悟らぬ不孝の子の果かなさよ / 親の孝行取らぬ子は（せぬ子は）/
井戸とて掘っても水が無し / 植木挿しても髭根無し /
蓮を離しても（植えても）花咲かぬ / 作たる葦戸（？）の下見れば /
何れも千草も枯れ果てる / 大事の（？）小径も道割れる /

親の孝行取りたる子は / 井戸とて掘っても水が湧く /
植木を差しても髭根差す / 蓮を離しても花が咲く /
作たる葦戸の下見れば / 枯枝千草も花が咲く / 大事の小径も道開く /

村さへ拝まれぬ（程）咲き果てる / 蕾んだ蓮華を手に持ちて /
蓮華の軸を杖とつき / 先世の橋から渡る時 / 御生の世の佛に手を引かれ / 靡くか背くな長の伴侶 / 阿弥陀の浄土までも渡された /

見る人聞く人退屈して / 是程恐れ入る事はない /

以上同じ内容であるが、より明確に二河白道を説いた念仏歌に小浜島に伝わる「ミンマン経文」がある。「弥陀経」「阿弥陀経」の意と思われる。ソーラ（盆）の送りが終わった十六日の明け方の「ナカミティ（中道）の儀式」の中で歌われる[10)]。

歌詞

「ミンマン念仏」

親の跡目を取らない手 / 後生を通る子は /
長さが八百の幅がただ / 一寸五分ある橋から通る時 /
橋の先いくと先も切れて / 橋の元行くと元も切れて /
さて上を見ると大蛇が私の目玉を / 抜いて食べよう食べようとし /
さて下を見れと鰐鯖が私の舌を / 抜いて食べようとするので /
さてあの島この島を見ると / 石の棒鉄の棒をざらざらと /
突いて通る念仏者（ニンブチャー）/ かわかゆみ（？）の念仏者（ニンブチャー）/
親の跡目を取り済まして / 後生を通る子は /
長さが八百の幅がただ / 一寸五分ある橋から通る時 / 同じ橋から通る時
橋の先いくと先も切れない / 橋の元行くと元も切れない /
出門の仏に手を取られ / 阿弥陀の仏に手を取られ /
付き添って通る念仏者 / かわかゆみの念仏者 /

（ハ）の「継親念仏」「継母念仏」と言われて広まっている、七月盆の起源譚の念仏歌である。継母を持つ子供が諸国を訪ねて実母を探すが大主（ウフス）から七月の中十日に管串という糸巻竹をとおして、のぞくと母に会えると教えられるという話である。

歌詞

「継親念仏」　　『沖縄人形芝居』所載

三歳の頃には親戻し（死別れ）/ 五歳の頃には親思いて /
七歳の年には親求めて / 国々様々巡れども /
我親に似居る人拝まれぬ / それから戻りて元に着く（家に帰る）/
昔の大主前（お爺さん）に行き遭いて / 先ず待ち召されよ大主前よ /
行先の当て無きの我なるも / 我よき名に係る事なれば /
国々様々巡れども / 我親に似居るひと拝まれぬ /
どうぞして大主前よ見せ召され / 当て無き童に頼まれて /
汝が親間時（まで）には拝まれぬ / 七月棚機の中の十日 /
後生世の七門の開く時 / クラグシ（管串）沢山に切り溜めて /
右の御袖に押し込めて / 左の御袖に押し隠し /
クダグシの目（孔）から一目拝め / 面影心に溜め拝め /
如何してアンマ（阿母）其處に参る / 如何して可愛子は此處に来つる /
父御が母求めて継親阿母と交際ならぬ / 内にし暗がりにして在す /
悪慾段々にたくらみ在す / 我も阿母と一道（一緒）になろう /
如何して可愛子はあゝ言てくれる / 汝一人中堅に（頼りに）立てて来た /
元の館に押戻って / 茶湯（ちゃとう）湯の初々も祀ってくれ /
物の初々も供えてくれ / 蜻蛉（アキツ）に成て来て受とるよ /
蝶に成て来れば親と思え / 夏の夏時雨も雨と思うな /
冬の時雨も霜と思うな / 朝夕阿母の涙と思え /

親の言う事は是程ぞ / 是聞き物識れ初の子 / 嗚呼南無阿弥陀仏は見えぬ佛 / 日中（いつも）何事物は親の為ぞなる /

この念仏歌は八重山地域だけではなく略述されながら沖縄本島にも広がっている。本島北部では各所で「念仏」「七月念仏」と表題されたものに、この「継親念仏」の歌詞の一節が歌われる。国頭村宇嘉（くにがみ うか）では「長念仏」と題されている。さらに福田晃はこの話の源流はわからないが、奄美諸島にも伝わっているとする[11)]。

島尻勝太郎分類の（ニ）～（ト）は葬儀の際に歌われたとするが、現在歌われていない。

2、「仲順流れ」と「二合節」

沖縄本島の中南部のうるま市平敷屋（へしきや）や嘉手納（かでな）町を中心として太鼓エイサーが一円に行われている。太鼓エイサーは八八八六の短い琉歌形式や八五八五の民謡の歌詞を掛け合いながら歌うもので、何々節と言われる「節歌」が多く、流行りや新しい節歌を入れている。なかでも「仲順流れ」と「二合節」はチョンダラーの念仏歌が元となって広まったものと思われる。「二合節」は「二合小」「エイサー節」「酒タボレ」「ピーラルラ」などの表題がつけられいる。

１）「仲順流れ」

仲順は中城村の字仲順のことで仲順を開いた仲順大主の物語といわれ、伊波文庫版『念仏集』には「ちょうしゃの流れ」とあり「長者の流れ」であろうとされる[12)]。

話は年老いた長者が三人の嫁から徳を授ける者を選ぶというストーリーで、孫を殺してその血を飲ませてくれという難題を投げかける。兄嫁たちは拒否するが末嫁が受け入れる。死んだ子を三本松の陰に埋めようとすると金銀の詰まった箱を掘り当て末嫁は長者になる。我が子を殺してまで親の孝行を尽くすという話である。

歌詞

「仲順流れ」　　『沖縄人形芝居』所載

長者の流れは七流れ / 長者の林は七林
黄金の面（おもて）は七面 / 白銀の面は七面 /
御園の桜の八重桜 / 庭に飾った打ち見れば /
牡丹の假身（花）真正が富士 / 鬱乎たる（こもったる）八千草も被り草 /
二人の貧者が言葉くじて（言い争って）/ 嫡子の嫁御も呼び寄せ /
次男の嫁御も呼び寄せて / 三男の嫁御も呼び寄せて /
嫡子の嫁御も言はば聞け / 長者の大主前（翁）は物成らぬ（命絶え絶えである）/
汝が子を殺して血を飲ませ / 老いて長者は狂れ召したか /
我が子は咲き出づる花なれば / 我が子を殺すことは成り侍らぬ /
寄って在す御年のぞ（こそ？）長さある（長過ぎる？）/
次男の嫁御も言はば聞け / 老いても長者は物成らぬ /
汝が子を殺して血を飲ませ / 老いても長者は物好み /
我が子は咲き出づる花なれば / 我が子を殺すことは成り侍らぬ /
寄りて在す御年の長さある /
三男の嫁御も言はば聞け / 老いても長者は物成らぬ /
汝が子を殺して血を飲ませ / 老いても長者の言はせる如く /
我が子は産し替ても / 親は又と拝まれぬ /
我が子を殺して血を上げよう / 三男の嫁御の御孝行 /
汝が子は別には送らせぬ（葬らせぬ）/ 長者の御屋敷の側に /
三本の小松の中の下 / それが下に送って置け (葬っておけ)/

右の手には鍬を抱き / 左の腰には箱を抱き /
御肩の頂に鍬を掛けて / 大御酒徳利並び据えて /
一鍬を取て落とせば目割れして / 二鍬取り落とせば赤土立ち /
三鍬取て落とせば土諸共 / 掘りたる穴の底みれば /
白銀の手箱の拝まれる / 黄金の黄箱（金箱）の拝まれる /
白銀の手箱も掘り上げて / 黄金の黄箱も掘り上げて /
右の手には黄金抱き / 左の手には白銀を抱き /
元の館に押し戻って / 玉の御簾も巻き上げて /
黄金の障子もつき開けよ / 父親母親も起き召されよ /
我が子は宝のぞ（か？）生れて居る / 一萬貫に見える金がある /
二萬貫に見える金がある / 数人の人に拝まれて /
萬人の人に拝まれて / 長者に成りたる面白や /
年を寄て行く迄も忘れられぬ /

名護市城（ぐすく）の島エイサーでは「仲順流れ」は「仲順ウーフや七流れ / 仲順ウフ主や七はやし」のみである。国頭村辺土名（へんとな）では今は歌われない歌詞の中に「長者ん大主」が記されている[13)]。太鼓エイサーも冒頭の二、三首を歌うのみの所が多い。小浜島には細部の異同はあるもののこの物語を伝えている[14)]。これは『沖縄人形芝居』に載せたようにチョンダラーが広めた話で、沖縄の昔話として語られていたり、明治時代になって芝居として演じられた。この話は『蒙求』に載っている郭巨譚（かくきょ）、郭巨が母を養生させるため子を埋めたところ金の釜を得たという話を元として、『今昔物語』や『宝物集』にもあり、「二十四孝」にも入っている。類話は奄美や本土にもある[15)]。

２）「二合節」

「二合節」「二合小（ニゴウグワ）」は「酒タボレ」ともいわれてエイサーの最初か、「念仏」の次に歌われる挨拶代わりの歌である。代表的なものに名護市屋部（やぶ）の歌詞を載せる[16)]。

歌詞

「二合節」　　（和文）

ピーラルラー　ララルラアーナ
（哨吶・チャルメラの擬音）
二合ドーヤ二合　　ナー升二合
（二合ください二合　　ねえ一升二合）
二合ドーヤ　　アツツドーヤ
（二合ください　　熱い（強い）酒）
一合小　　オタビ召しヤイラバ
（一合ちょっとくださるなら）
二合小　　オタビ召しヤイラバ
（二合ちょっとくださるなら）
カミテ　ミグヤビラ
（頂戴して巡りましょう）
サブエンサブエン　ピーラルラー　ララルラアーナ
二合ドーヤ二合　　ナー升二合
（二合ください二合　ねえ一升二合）
二合ドーヤ　　アツツドーヤ
（二合ください　　熱い（強い）酒）
クマヌ　アンシメーヤ
（ここの女御主人は）
ウチム　ユタシャー
（お胆（御心）が良い人じゃ）
アヤグ　ウタビミセラバ
（歌を歌ってくださいましたら）
カミテ　ミグヤビラ
（頂戴して巡りましょう）
サブエンサブエン　ピーラルラー　ララルラアーナ
二合ドーヤ二合　　ナー升二合
（二合ください二合　ねえ一升二合）
二合ドーヤ　　アツツドーヤ
（二合ください　　熱い（強い）酒）

別の地区では三合とか五合の歌詞も出てくる。太鼓エイサーでチョンダラー役が道化て酒甕を担いで出てくるのは、この歌詞の反映である。

この歌詞の一合・二合・三合・五合はチョンダラーの門付けの最初に歌う「ウジュウヌウタ（御知行の歌）」に由来すると思われる。チョンダラーは門付けにあたって自らの由来を語ったとされるが、その一つは「御知行の歌」でチョンダラーが沖縄に来るにあたって知行すなわち禄米が約束されていたが、来てみるとそのようなことはなかった。あの時こう言ったではないかという恨み歌を歌って、聴衆を笑わせた。

歌詞

「御知行の歌」　　『沖縄人形芝居』所載

一萬石の御知行は / 勿論一萬石の御指定よ /
一萬一石一斗一升一合一勺迄は /
耳の端にぞ収めたる / 受け取り渡しの噂のみは頗る高い

二萬石の御知行は / 勿論二萬石の御指定よ /
二萬二石二斗二升二合二勺迄は /
耳の端にぞ収めたる / 受け取り渡しの噂のみは頗る高い /

三萬石の御知行は / 勿論三萬石の御指定よ /
三萬三石三斗三升三合三勺迄は /
耳の端にぞ収めたる / 受け取り渡しの噂のみは頗る高い /

四萬石の御知行は / 勿論四萬石の御指定よ /
四萬四石四斗四升四合四勺迄は /
耳の端にぞ収めたる / 受け取り渡しの噂のみは頗る高い /

五萬石の御知行は / 勿論五萬石の御指定よ /
五萬五石五斗五升五合五勺迄は /
耳の端にぞ収めたる / 受け取り渡しの噂のみは頗る高い /

十年では十六段だよ九年では六段歩よ /
黄金も白銀も宝も / 遣るに（積んで）就いてのそれが渡しの /
えいやさあ　こらさあ　よいさあ /
ひやるが　いやさっさあ /

最後の掛け声には空手のような仕草がつく。この数字を読み上げる部分が「二合節」「酒たぼれ」の酒の量になって、「御知行の歌」同様にエイサーの口上の歌になったと思われる。「御知行の歌」はチョンダラーが正月の万歳芸として演じたのが元であろうとされるが、本土では「升斗舞」「升舞」「升ばかり舞」として鎌倉時代よりあった。「一万升には一万一千一百斛（石）一十斗一升一合一勺納めれば――」以下十万升まで数え上げる、おめでた歌である[17)]。

「仲順流れ」「二合節」は二、三行の歌文句として沖縄本島に残っているが、全文を伝えるものは『念仏集』などの記録のみである。ただこれによってチョンダラーの影響による念仏歌の伝播が考えらえる。

3、念仏歌芸能の構成

沖縄の盆行事であるアンガマーや島エイサー（手踊りエイサー）の歌詞をみてきた。前著の「沖縄の念仏歌とチョンダラー」ではアンガマーや島エイサーが念仏歌とそれ以外の何々節というような民謡の遊び歌もしくはめでた歌から成り立つことを述べた。もう少しそのことを考えてみよう。とりあげた十二ヵ所の事例を検討する。

この報告で取り上げた念仏歌とは「無蔵念仏」「孝行念仏」「継親念仏」の三種で、親の供養や七月盆の由来を内容とするものであった。この他に八重山で「七月念仏」（竹富島）と言われ、「無蔵念仏」と重複する念仏があるが、これも含む。またこれとは別に「かの山念仏」（与那国島）も言われる念仏歌がある[18)]。「大和の山伏（園山念仏）」には大和から来た山伏が念仏鉦を叩き経文を唱えるという念仏歌である。このように八重山では多

くの念仏歌が歌われた。伊波普猷文庫にある『念仏集』「天神世界」「梅のだんぎ」「あの経」「春咲花」も同じく親の供養や盆の由来を説くもので、歌詞のみが残っているが念仏歌である。

沖縄本島北部でも「念仏」と言われる歌詞があるが、歌われ方が一・二節（上句・下句）に囃し言葉をいれて次々に歌うもので、八重山のように物語性を持って歌うということはない。ただし『念仏集』などの記載されたものにはある。本島北部で「念仏」とされるのは「仲順流れ」と「継親念仏」の一・二節を取り入れたものである。

その他に「山に育つる山がらし　浜に育つる浜千鳥」と「七月七夕なのかの十日　七月の盆に山原にくだりて」の歌詞のものも「念仏」といわれ、計四種の歌がある[19)]。「山に育つる」は仏事との関係は不明である。また、前に述べたように「仲順流れ」は長者大主の子殺しの物語で仏事とは関係ない内容なので念仏歌とは言えない。

八重山で念仏歌の後に余興・披露の歌として歌われる「かぎやで風」や「めでた節」など、また本島北部で歌われる「久高万寿」「唐舟ドーイ」や「鳩間節」「越来節」などの各種の節歌の内容は仏事とは関係ない。亡き人を楽しませるためとも言われるが、「めでた節」まで歌うのは奇異である。

よく歌われる「久高万寿」は久高万寿大主が妾を求める歌で、「唐船ドーイ」は唐船が那覇にきたが若狭村の瀬名波の爺はなぜか港に駆けつける事はなかったという話である。「久高万寿」「唐船ドーイ」は太鼓エイサーの定番となっている。

これらの念仏歌と遊び歌・めでた歌との関係を芸能形態からみていこう。

八重山地域

1）波照間島

「無蔵念仏」は14日の「ムシャーマ」の行列の最後につき、渦巻き状に廻りながら歌い、段々に腰を低め、あひる歩きのようになり、しゃがむ姿勢になって終わる。

「ゴフダイ念仏（孝行念仏）」アンガマー[20)]が15日に新盆の家の座敷の上がり、座って唱える。手拍子のみで三線なし。（写真２）

2）西表島祖内

「無蔵念仏」座敷に上がり、地方（三線）が付き、仏壇に向かって踊る。庭では仮面をつけたアンガマーが輪になって踊る。

「御前風（かぎやで節）」「祖納岳節」「西表口説き」他　座敷で仏壇に向かって踊る。

最後にアンガマ―も座敷にあがって踊る。

3）黒島

13日「七月念仏」14日「無蔵念仏」は庭で輪になって踊る。両日とも「上がり口説き」他を念仏歌の後、輪になって踊る15日「コウフダイ念仏（孝行念仏と不孝念仏）」は歌うのみ。

4）小浜島

種々の念仏があるが「無蔵念仏」は庭で地方（じかた）が中に座り、輪になって踊る。

「かぎやで節」他があり、アンガマ―の余興の踊りがあるが、念仏衆の前で披露する形で輪にならない。

5）竹富島

13日「孝行念仏」14日「無蔵念仏」「七月念仏」15日「大和の山伏（園山節）」である。

地方（じかた）は座敷に上がる。念仏衆が庭で輪になって踊る。

いずれの日も「かぎやで節」以降は庭から仏壇に向かって列を組んで踊る。

6）石垣島登野城

新盆の家の座敷への入退場時、輪になって踊る

「無蔵念仏」はウシュメーとンマー（爺婆の面）が座敷の仏壇前で立って踊る。（写真３）

「かぎやで節」「めでた節」他アンガマー

は座敷で仏壇・遺族などの前で踊る。（写真４）

沖縄本島北部

念仏歌・遊び歌を問わず、すべて輪踊りである。

１）名護市世富慶（よふけ）

公民館の櫓の周りを廻る。拝所三ヶ所を回る。輪踊りで、最初に「久高万寿」を歌う。

２）名護市 城（ぐすく）

名護市中心部の十字路で踊る。旗を立て、その周りを輪になって踊る。道行は「唐船ドーイ」で、最初は「仲順流れ」である。（写真５）

３）名護市屋部（やぶ）

13日はヤー（家）巡りで新築や招いてくれた家を回る。14日15日はアジマ（十字路）巡りで、ニーヤ（根屋）から始まり十字路十字路を巡る。輪踊りで中央に旗を立てる。

４）本部町瀬底（もとぶ　せそこ）

13日新盆の家を、14日は二ヵ所の辻で、地方を真ん中にして二重の輪になって踊る。道行は「唐船ドーイ」で、最初に「二合節」続いて「念仏（やまがらし）」「久高万寿」他。輪踊りである。

５）大宜味村謝名城（おおぎみ　じゃなぐすく）

七月モーイ（舞）と言い、夕刻に公民館で「七月念仏（歌詞は「酒たぼれ」）」「たかはなり節」他を歌う。女の人のみの踊りで鉢巻きをして、手拭いを手に持つ。チジン太鼓のみで輪になって踊る。（写真６）

続いて「謝名城エイサー」といい男女で、地方付きで輪になって踊る。「テンヨー節」で入場し、「久高万寿」「上がり口説き」他と続く。

この日は豊年祭でもあり、昼に豊年祭の輪踊りや「かぎやで節」・「男舞」の奉納舞が山上のノロドンチでノロを前にして行われる。

６）国頭村与那（くにがみ　よな）

七月モーイ（舞）と言い、最初に「七月念仏（継親念仏）」を歌い、以降「与那節」他を歌う。

アサギマー（庭）とノロドンチマー（祝女殿内庭）の二ヵ所で踊る。二ヵ所とも輪踊りである。

７）国頭村宇嘉（うか）

七月モー（舞）と言い、アサギマー（庭）から三ヶ所のムトゥヤ（元屋）を回り、アサギマーで踊る。輪踊りで、道行は「唐船ドーイ」で、最初に「あがた門」（あちらの門は美しいという褒め歌）歌い、他の歌が続く。念仏帳に「長念仏（継親念仏）」の長い歌詞がある。

以上であるが八重山地区の「無蔵念仏」や「孝行念仏」は座敷に上がって唱える（祖内・波照間島・登野城）。特に波照間島の孝行念仏は座って手拍子だけで唱えるいう、もっとも素朴なものである。座敷に上がるのは士族の家だけであったという話がある。黒島の「コーフダイ念仏」も唱えるだけである。これら波照間島や黒島のように太鼓や三線をつけない形が念仏歌の唱えの元であろうか。

祖納と登野城では仏壇に向かって踊るが、念仏歌では輪にならない。これが次の段階である。

竹富島・黒島・竹富島では「念仏歌」の時は庭で輪になって踊る。祖納ではアンガマーは庭で輪になって踊る。座敷に上がらず、庭で踊る念仏歌は輪になって踊る。

波照間島の「無蔵念仏」は輪踊りから、すぼめるように渦になり膝を落とすという特異なものである。立って輪踊りをしながら最後にはしゃがむ（座る）ということで表している。

念仏歌は座して唱えるものであるが、座敷で踊る場合、奉納の意味から仏壇に向かって踊る。庭で踊る場合は輪踊りになる。輪踊りに意味があった。招くとか送る意味と思われる。

八重山でも本島北部でも「かぎやで節」を

はじめ、めでた歌や褒め歌さらに民謡の何何節になると、披露となって、仏壇や遺族・念仏衆に向かって立ち、列を組むなどして踊られる。祖納のアンガマ―では輪になって踊っているが、小浜島のアンガマ―のでは余興の一つとして踊るので輪踊りにならない。このように八重山では念仏歌の輪踊りと余興の踊りの二部構成になっていて、それぞれの意味が異なっているようである。念仏歌が仏事であるのに対して、余興の踊りは豊年祭の舞台踊りに重なるおめでた事で踊る形態も異なる。

沖縄半島北部はすべて輪踊りである。また拝所巡りや根屋・ノロドンチでも踊ることから神事（かみごと）ともいえる。また辻や十字路で踊るのも辻鎮めの要素もあると思える。新築の家を巡るめでた事でもあった。また多くが上句・囃し言葉・下句・囃し言葉の掛け合いになっていることから、奄美諸島の八月踊りとの関連も伺える。沖縄本島北部の島エイサーの歌詞からみると多くが念仏とあるものの、仏事としての役割が薄い。「念仏」といわれものも「仲順流れ」のように仏事でない物語歌の一節が歌われている。多くは遊び歌・褒め歌・めでた歌で、むしろ神事・祝い事としての性格が強い。そのことは七月盆のエイサーが八月十五日のプーリー（豊年祭）の輪踊り・巻き踊りに遡ることも考えられよう。八重山の念仏歌が輪踊りになったのもその流れの中で考えると納得できる。本島北部の島エイサーが掛け歌であり、輪踊りである理由もここにあると思える。

注

1）坂本　要「沖縄の念仏歌とチョンダラー―アンガマーと島エイサー―」（『仏教経済研究』No.49駒澤大学仏教経済研究所2010年）に一覧表を載せる。P58～59

2）池宮正治『沖縄の遊行芸』ひるぎ社1990に資料として掲載する。同書に「沖縄県史編纂史料」記載の首里尋常小学校報告の念仏集が所載されている。

3）池宮正治「伊礼本『念仏集』－解説と本文－」『沖縄文化研究』№18法政大学沖縄文化研究所1992

4）折口信夫「沖縄採集手帖」『全集第16巻』中央公論社1967 p146～148

5）宮良當壯『沖縄の人形芝居』郷土研究社1925

6）坂本　要2010　一覧表の追加
波照間島は14日ムショーマで「無蔵念仏」15日アンガマーで「ゴフダイ念仏」である。
また『竹富町史第二巻　竹富島』2011p519の表題「孝行念仏」の歌詞は「無蔵念仏」である。

7）島尻勝太郎「沖縄仏教史の一側面（漂泊の念仏者）」『興南研究紀要』創刊号興南高校文化研究同好会1972　p10

8）「父母恩重経」には多くの異本があり、大正蔵「父母恩重経」には十恩徳の記述は一部で、敦煌本･高麗大蔵経･「十恩徳讃」等に全文がある。
金岡照光『漢訳仏典　中国の古典10』学習研究社1983p37
由木義文『父母恩重経の話』大蔵出版1986 p62
新井慧誉「「十恩徳讃」について」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』№36 2006
他　新井慧誉の論文多数

9）島尻勝太郎1972　前掲　p12

10）竹富町教育委員会『小浜島の芸能』2006・歌詞の和文は『竹富町史　第三巻小浜島』2011p538～539による。

11）福田　晃「ニンブチャーの文藝」『南島説話の研究』法政大学出版1992

12）池宮正治『沖縄の遊行芸』前掲　p115

13）外間守善･宮良安彦『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』角川書店1979　p564～565

14）小林幸男「［歌詞・楽譜資料］沖縄県国頭村辺土名のエイサー」『関西楽理研究ｘｘｖ』京都女子大学短期大学部初等教育学科音楽研究室2008 p64

15）福田　晃「念仏「仲順流れ」前後」『南島説話の研究』前掲

16）屋部のエイサーのプリント版に一部和文歌詞を載せる。

17）池宮正治「沖縄の遊行芸―チョンダラーとニンブチャー―」後藤淑編『遊行芸能』岩崎美術社1989 p200
高野辰之『新訂増補日本歌謡史』1981 p646

18）『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』前掲　p570・574

19）小林公江･小林幸男「名護市の手踊りエイサー―本部町と今帰仁村との比較を通して―」『関西楽理研究ｘⅨ』2002発行前掲　p21＜念仏＞
小林幸男「名護市名護地区のエイサーと本部町瀬底のエイサーとの比較」『関西楽理研究ｘｘⅦ』2010　発行前掲　p8～9＜念仏＞

20）アンガマーについては祖霊・精霊・女の人であるという諸説あり、盆だけでなく種子取り祭（西表島祖納）・屋移りの時（黒島）でも踊られる。語源からは「アンガマー（女性の舞）」説が強い。
映像『八重山のアンガマ―』撮影坂本　要・編集春日聡　ヴィジュアルフォークロア2017

1、嘉手納市のニンブチャー姿の地方三線（じかたさんしん）

2、波照間島のアンガマー（村の役員が紙の仮面で歌う）

3、石垣島登野城のウシュメーとンマー（爺婆）

4、石垣島登野城のアンガマー（顔を隠して踊る）

5、名護市城（ぐすく）の島エイサーの輪踊り

6、大宜味村謝名城（じゃなぐすく）の七月モーイ（舞）・（手拭いをかざす）